

『さて、主の天使はフィリポに、「ここをたつて南に向かい、エルサレムからガザへ下る道に行け」と言った。そこは寂しい道である。27 フィリポはすぐ出かけて行った。折から、エチオピアの女王カンダケの高官で、女王の全財産の管理をしていたエチオピア人の宦官が、エルサレムに礼拝に来て、28 帰る途中であった。彼は、馬車に乗って預言者イザヤの書を朗読していた。29 すると、“霊”がフィリポに、「追いかけて、あの馬車と一緒に行け」と言った。30 フィリポが走り寄ると、預言者イザヤの書を朗読しているのが聞こえたので、「読んでいることがお分かりになりますか」と言った。31 宦官は、「手引きしてくれる人がなければ、どうして分かりましょう」と言い、馬車に乗ってそばに座るようにフィリポに頼んだ。32 彼が朗読していた聖書の箇所はこれである。「彼は、羊のように屠り場に引かれて行った。毛を刈る者の前で黙している小羊のように、／＼口を開かない。33 卑しめられて、その裁きも行われなかった。だれが、その子孫について語れるだろう。彼の命は地上から取り去られるからだ。」34 宦官はフィリポに言った。「どうぞ教えてください。預言者は、だれについてこう言っているのでしょうか。自分についてですか。だれかほかの人についてですか。」35 そこで、フィリポは口を開き、聖書のこの箇所から説きおこして、イエスについて福音を告げ知らせた。36 道を進んで行くうちに、彼らは水のある所に来た。宦官は言った。「ここに水があります。洗礼を受けるのに、何か妨げがあるでしょうか。」38 そして、車を止めさせた。フィリポと宦官は二人とも水の中に入って行き、フィリポは宦官に洗礼を授けた。』（使徒言行録8章26－38節）

今日の聖書の言葉は、エチオピア人の宦官であった人が洗礼を受けて信仰の道に入るところが記されています。この人は、エルサレムの神殿で礼拝するためにはるばるアフリカの地からやってきていました。その帰り道に、人通りの少ない「寂しい道」を通っているとき、伝道者であったフィリポという人物に出会いました。この宦官の人は、この時丁度旧約聖書のイザヤ書のある箇所を読んでいるところでした。そこには、食べられるために犠牲となる羊のように、人々のために自らの命を犠牲に捧げる一人の人物のことが記されています。その人物は、自らの命を他者を生かすために用いるのですが、しかしそのことが感謝されることもなく、大変軽く扱われてしまいます。裁判もろくに行われることなく、処刑されてしまうような低い立場に置かれていました。ここで命が絶たれてしまえば、この地上にその人の子どもや子孫は残ることはありません。そのような、報われることのない悲しい一人の人間の生涯が、このイザヤ書の箇所には綴られています（イザヤ書 53章1-12節）。

このように、不条理な人生を送らざるをえない人というのは、少なからずこの世の中に存在しています。この宦官の人は、この聖書箇所をたまたま読んでいたのでしょうか。それとも、とても気になって何度も読み返していたのでしょうか。もし、彼がこの聖書の箇所に心が引きつけられていたのだとしたら、それは自分が置かれていた状況と聖書の中の人物が響きあって共鳴していたからかもしれません。彼はエチオピアの国の女王の高官でしたので、地位としては大変恵まれています。そして、女王の全財産の管理を任されていたので、金銭的にも大変裕福な生活を送っていたことでしょう。それなのに、彼がこの人々の犠牲となる羊のような人物の姿に引きつけられていたのだとした

ら、何か理由があったはずですが。一つ考えられるのは、彼は高い地位に着いていたからこそ、そこから落ちることへの恐れにさいなまれていたのかもしれませんが。高い地位の役職には大きな責任がついて回ります。何か失策をしてしまえば、回りのライバルたちから追い落とされてしまいます。女王の機嫌を損なえばすぐに失脚させられるという、先の見えない不安定な日々を送っていたのでしよう。回りの人々が自分に従い親切にしてくれるのは、高い位の役職に就いているからです。もし、その役職の肩書きを失えば、とたんに卑しめられて軽々しく扱われてしまうということを、彼は沢山その目で見てきたはずですが。そしてまた、彼は宦官という特殊な形の役人でした。宦官というのは、男性性器が去勢されていて子どもを造ることが出来無くされていた人のことです。ですので、いくら財産や高い地位を築いても、それを引き継ぐ子孫を持つことが出来なかったのです。つまり、女王に、そして国の民に仕えるために、彼は自らの楽しみや喜びを放棄させられていたのです。ですので、人々のために自らを犠牲として捧げる羊のような人物の姿に、深く共鳴していたことが想像出来ると思います。

そこにフィリポという一人の伝道者が、たまたま同じ道を通っていました。彼はフィリポの導きによって、この聖書の中の人物がいったい誰なのかを知ることが出来ました。このイザヤ書に出てくる、寂しく悲しいその生涯を運命付けられている人物のことを、聖書の民の間では、「苦難の僕」と呼んでいました。この苦難の僕は、人々に真の救いをもたらすために一生懸命働いていましたが、しかし人々はそのことを理解してはくれませんでした。人々は、彼を軽んじその働きを評価しようとせず、ほとんど見捨てるように相手にしません。しかし、この人物が担ったのはその彼らの病でした。そして、人々の痛みを自らが代わって負っていたので、彼は誰よりもこの地上で苦しんだのです。自分の家族をもうけたりしてこの地上の喜びを謳歌するよりも、たとえ自らの子孫が絶たれても、多くの人々に救いをもたらすことに喜びを見いだしていたのです。フィリポは、この苦難の僕とイエスさまを重ねて、この宦官の人に福音をつたえました。誰かの犠牲とされることは、納得の出来ない許しがたい苦痛であります。そのような理不尽なことに人は心を開いて好意を持って反応をすることは、とても出来ないでしょう。その一方で、自然の美しさに共鳴するのは容易です。沈んで行く夕日や、川面に映るきらきらと光る日の光を見て、神々しく聖なる存在をそこに感じることも起こりやすいことです。納得のいかないこと、不条理なこと。これと向き合い、心を響かせることは本当に難しいことです。

イエスさまの十字架の死ほど、この世界で不条理きわまりないことはありません。イエスさまの十字架の死は、世界が、世の人々が、神の光を、聖なる最大のものを捨てたことを意味しています。すべての人が捨ててしまった卑しめられた肉の塊を、神は死者の中から復活させ、すべてに勝る栄光をお与えになったのです。このイエス・キリストの復活の光りによって照らされるとき、低くされること、卑しめられること、軽く扱われることの中にこそ、人にとって最も価値のあることが潜んでいることが見えてきます。誰かの犠牲となることのまさにそのところに、この世界の秘密が隠されていて、もっとも心が揺さぶられることが 充ち満ちているのです。共感できなこと、最も心を響かせることが難しいことが、返って人の限界を超えさせて神の領域を垣間見させてくれるのだということです。

洗礼を受けてキリスト教信仰に入るといえることは、この不条理きわまりないことの中にこそ真の大切なことが隠されているのだという方向に人生の舵を切ることを意味していると言えるでしょう。洗礼を受けるとき、イエス・キリストの十字架に共に付けられ共に屠られることを体験いたします。そして、その苦悩の縁から新しい命に、イエス・キリストと共に 神によって死者の中から復活させられるのです。その新しい命は、たとえ理不尽な運命を背負わされたとしても、そのただ中で生きる理由や目

的を見いだすことの出来る新しい人間の姿であります。

宦官の人がフィリポに出会ったのは、たまたまと先ほど私は言いました。しかし、もし彼がイザヤ書の苦難の僕に心が揺さぶられていなかったら、そのたまたまはおこりませんでした。苦難の僕と自分の心が響き合っていたからこそ、彼はフィリポと接触することが出来たのです。つまり、偶然のように思われますが、しかしそこには必然的な接点があったということです。そのことは、彼に福音を伝えたフィリポにも同じことが言えます。フィリポを導いたペトロなどの使徒たちと心の接触と重なりがあったからこそ、フィリポもまた伝道者へと変えられて行きました。そして、そのペトロたち使徒たちもまた、イエスさまと出会ったときに心が揺さぶられ、抗しがたい心の響き合う共鳴体験をしているのです。卑しめられた十字架に、この世界で最も復活の価値を置くそういった心が、こだまして響き合っ  
て行ったのです。その響き合いが、とうとう私たちの所に届けられました。それは、イエス・キリストを通して、神さまの御心と深く響き合っ  
て繋げられて行った営みなのであります。

人が寂しい道を通ってきたことは、イエス・キリストとの出会いによって報われます。寂しいこの道を通ってきて本当に良かったとそう心から喜ぶとき、私たちの救いは確かなものとなっているのです。そのことを神に感謝いたしましょう。